

和歌山県立日高高等学校附属中学校 柚木勝志、松本能  
和歌山大学教育学部 岩野清美（文責）

## 1 研究の目的

今般の学習指導要領改訂では「改訂の考え方」として「よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度の育成」<sup>1</sup>が掲げられた。社会科学習においても、社会問題を扱うことの重要性はますます高まっていると言えよう。しかしながら、学習者である子どもには、「自分が下層に落ちないための学び」として受け止められているのが社会問題を扱う社会科授業の実際ではないだろうか。社会の自明化<sup>2</sup>と自己責任論が広がる現代社会で日常生活を送る子どもたちにとって、自分を取り巻く社会の現状を追認し、そこに多少問題があろうとも、むしろ問題があるからこそ、社会の構造によって不利益を被ることのないよう自己を変容させていくというのはごく自然な態度だろう。このようなフレキシビリティ(柔軟性)に対し、塩原良和は、他者との「共生」を模索しながら社会の変化に向き合うリフレキシビリティ(再帰性)の重要性を主張する<sup>3</sup>。「共生」は、社会的な不平等のコンテキストにおいてそれを是正するために用いられてきた概念である<sup>4</sup>。本研究は、「社会学的想像力」に着目し、それを働かせることを通じて、このような「共生」を実現する社会科授業を構成しようとする試みである。

## 2 「共生」と「社会学的想像力」

### (1) 「社会学的想像力」

「社会学的想像力」はミルズが1959年に同名の著書<sup>5</sup>を出し、広く使われるようになった概念である。ミルズの著書の翻訳者でもある伊奈正人・中村好孝は社会学的想像力について、個人的な問題と社会問題を相互に照らして考え、不安と無関心を引き起こしている構造を批判的に考察することであり、そのことによって、社会問題を自分の問題として引き受けて考えることが可能になると説明している<sup>6</sup>。また、前述の塩原は、社会のなかで起こる出来事について、それに対する応答責任があるものとして捉える想像力<sup>7</sup>として社会学的想像力を捉えている。

本研究で授業開発を行う「子どもの貧困」をめぐるのは、保護者の収入により子どもの学力や大学進学率に大きな差があること、またその背景に子どもの貧困をもたらしてしまう再分配の失敗や教育に対する公的負担の少なさという社会の問題があることが指摘されている。しかしながら、保護者の収入や子どもの学力が個人の問題として捉えられている限り、問題のある当事者とみなされたマイノリティは沈黙してしまい、不平等を温存する社会の中で利益を享受しているマジョリティは自らの加害可能性に気づくことなく、問題があることを無視することができる。この問題を解決していくためには、一見個人的に見える「子どもの貧困」という問題を社会の問題に照らして考えること、無関心である自分の加害可能性と無関心を引き起こしている構造を批判的に考察すること、つまり、社会問題を自分の問題として引き受けて考える社会学的想像力が重要である。

このように、社会学的想像力を働かせることで自分自身の置かれている位置とマイノリティに対する加害可能性に思いを致すことを通じ、社会問題に正面から向き合うことができれば、マイノリティを作り出し温存させている社会システムを変えることをめざし、ともに社会問題に正面から向き合っていく共生を実現していくことができるだろう。

では、社会学的想像力とはどのようにして育成されるものなのか。不平等によって生じる抑圧が無視されてきたがゆえにマジョリティとマイノリティの分断が生み出されてきた<sup>8</sup>ことを踏まえ、塩原は、抑圧されてきた他者の声を聞くこと<sup>9</sup>、坂本佳鶴恵は不利益を被っている立場に身を置いたときに起こる不都合を想像すること<sup>10</sup>の重要性を指摘する。筆者はこれまで、「学びに向かう力」の育成と評価に関する研究のなかで、「あなた自身の身に置き換えたり、想像力を使用する」、「想像する」ことの重要性を見いだしてきた<sup>11</sup>。本研究は、この「想像」を社会学的に位置づけたものと言えよう。

### (2) 「社会学的想像力」と社会科授業研究

「他者の声を聞く」ことに関し、社会科授業研究の文脈で

は「理解」の授業原理<sup>12</sup>として広く実践が行われてきた。社会に生きる具体的な個人に目に見えない社会の構造が及ぼす影響を考えることを通して、社会についての学びを深めていく「理解」の授業は、子どもの学びの論理に沿っている。しかしながら、今日、社会の分断と対立のなかで、社会の不平等によって不利益を被っている他者に対する社会学的想像力が衰退している<sup>13</sup>ことが指摘されており、意図的な社会学的想像力の育成が求められているといえよう。

ところで、「抑圧された他者の声を聞く」と言っても、その声は常に語られるとは限らない。抑圧された人々は、無気力、無力の状態に追い込まれ、沈黙せざるをえないこともある<sup>14</sup>。本研究ではこのような構造に焦点をあて、沈黙させられている他者の状況を想像するとともに、抑圧されている他者が沈黙を守ることで現状の社会構造が維持されていることに気づかせ、そのような問題を無視することのできる自己の特権性にも気づかせたい。

### 3 社会学的想像力を働かせるプロセスを組み込んだ社会科授業の構成

これまで述べてきたことから、社会学的想像力を働かせるプロセスを組み込んだ社会科授業を次のように構成する。

A 教材：個人の私的問題が端的に表れたライフストーリーを取り上げる。

B 授業構成：

パートⅠ 個人の私的問題と社会構造の関わりを探究し、問題を「私たちの問題」として構築する。

パートⅡ 個人のライフストーリーについて、社会学的想像力を働かせながら探究する。

授業構成について、説明を補足しよう。

パートⅠでは、個人の私的問題と社会構造の関わりを探究し、一見個人の私的問題に見えるものが、私たちを取り巻く社会構想に由来する、「私たちの問題」であることをつかむ。しかし、授業がここでとどまってしまうのは、だれもが社会問題によって不利益を被る可能性があるからこそ、自分はその不利益を被ることがないように振る舞い方を変

えていくフレキシビリティの必要性を認識させる場になりかねない。そこで、パートⅡで、社会学的想像力を働かせながら個人のライフストーリーを探究する。具体的には、下記の3つの問いについて考える。

- ① 現在の社会構造のなかで自分が不利益を被ったときに、つらいと感じるのはどのようなことか。
- ② 自分が不利益を被ったときに、周りの人に知ってもらいたいのはどのようなことか。
- ③ ①、②を通して、自分の考えが変わったのはどのようなことか。

①は社会構造のなかで不利益を被っている人のリアリティを感じるため、②は自己の加害可能性に気づき不利益を被っている人との共生と結びつきを模索し、課題解決をめざすことの必要性を感じさせるための問いとして設定している。これらの問いを通して子どもの貧困が税や社会保障など日本の社会の構造による問題であるため多くの人に知ってもらいたいと考える生徒がいる一方で、周りの人に家庭の問題を訴えても解決できるわけではないし、勉強が苦手だったり人間関係ができないのは個人の問題なので周りの人に知ってもらいたいことは特になく感じる生徒もいるだろう。そこで、子どもの貧困に陥っている人が「声を上げにくい」と感じ、また実際に沈黙することで得をしている人はだれだろう？と投げかけ、既存の社会構造のなかで利益を得ているマジョリティの存在に気づかせることでマジョリティとしての自分の加害可能性に思いを致すことを期待している。また、グループ活動のなかで意見交換を通して不利益を被っている人を下にみなす言説が自己を含む多くの人に受け入れられていることを確認させ、そのことが共生を阻んでいることに気づかせたい。

③は、みずからのリフレキシビリティについて振り返る場の設定を意図している。学びを振り返ることを通して、よりよい社会をめざして課題を解決しようとする自己を発見することを期待したい。

それでは、社会学的想像力の育成をめざした授業の実際はどのようなものか。以下、「子どもの貧困」を事例に授業を構成する。

## 4 授業事例

### (1) 目標

「子どもの貧困」問題が発生する社会的な原因について説明し、問題状況に置かれた個人の状況を社会学的想像力を働かせながら探究し、他者との共生を構築しようとする。

(2) 本時展開

段階	主な問い	予想される反応	指導上の留意点	資料
パート I	<p>○ 「子どもの貧困」が与える影響を確認しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>世帯収入と学力、大学進学率との関係を示したグラフを見て、どのようなことに気づくだろう？</li> <li>「子どもの貧困」の状況を確認しよう。</li> </ul> <p>◎ 本時の課題をつかもう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもの学力と世帯収入の間には関係があり、世帯収入が高いほど、国語、数学の学力が高い。</li> <li>大学進学率と世帯収入の間には関係があり、世帯収入が高いほど大学進学率が高い。</li> <li>相対的貧困とは、その国の文化水準、生活水準と比較して困窮した状態である</li> <li>日本は、OECD 諸国のなかで、子どもの貧困率が高い。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>資料 1: 世帯年収と学力の関係</li> <li>資料 2: 世帯年収と大学進学率との関係</li> <li>資料 3: 日本の相対的貧困の基準となる所得</li> <li>資料 4: 世界の子どもの貧困率</li> </ul>
<p>子どもの貧困が起こる原因について深く考えよう。</p>				
	<p>○ 「子どもの貧困問題」がなぜ起きるのかを考えよう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本では、ひとり親世帯の貧困率が再分配後も改善されていない。</li> <li>日本は、OECD 諸国のなかで、教育に対する公的負担が小さく、私的負担が重くなっている。</li> <li>○ 日本では、税や社会保障による所得の再分配が有効に機能していないなかで教育に対する公的支出が少ないため、貧困家庭では教育に十分な費用をかけることができず、学力が伸び悩んだり、進学をあきらめたりすることにつながりやすい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「子どもの貧困」問題を社会構造のなかで把握させ、「私たちの問題」として構築する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料 5: ひとり親世帯の貧困率の国際比較。</li> <li>資料 6: 各国の教育に対する公的負担の GDP 費</li> </ul>
パート II	<p>○ 「子どもの貧困」にある人の状況について考えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自分がKさんだったら、どのようなことをつらいと感じるだろう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>貧困については、他の子どもが当然に享受できる権利を受けることができない状況にあるにも関わらず、「個人の問題」であり克服可能であるとされ、問題を抱えた他者が困っている状況を表出しにくい現状にある。</li> <li>子どものころから「自分の役割」として家事を引き受けていたこと。</li> <li>中学校でお金がないので遊びに行けず、人間関係ができなかったこと。</li> <li>お金の問題で高校進学をあきらめ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>社会構造のなかで不利益を被っている人のリアリティを感じ取らせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料 7: Kさんのライフストーリー</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分がKさんだったら、どのようなことを周りの人に知ってもらいたいと考えるだろう。</li> <li>・ 「子どもの貧困」状態にある人が沈黙することで、得をしている人はどれだろう？</li> </ul> <p>○ グループで意見を交換しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 友だちの考えとの共通点を考えよう。</li> <li>・ 多くの人が「問題に対して声を上げても仕方がない」と考えることにどのような問題があるのだろう。</li> </ul> <p>○ Kさんが置かれている状況について考えたことで、自分の考えの変化したことを共有しよう。</p>	<p>たこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子どもの貧困は、税や社会保障など日本の社会の仕組み(構造)の問題であること。</li> <li>・ 周りの人に家庭の問題を訴えても解決できるわけではないし、勉強が苦手だったり人間関係ができないのは個人の問題なので、周りの人に知ってもらいたいことは特にない。</li> <li>・ 貧困状態にない人は、貧困状態にある人からの声が届かない限り、再分配が有効に機能していない状態をそのままにすることができるので、得をする。</li> <li>・ 問題によって不利益を被っている人を下に見ていた。</li> <li>・ 問題に対して声を上げても仕方がないと思っている。</li> <li>・ 多くの人が「声を上げても仕方がない」と考えることが、問題の解決を阻み、問題の再生産を生み出している。</li> <li>・ 社会の多くの人が社会の問題について知らない、既存の社会のままでよいと感じることが、苦しい状況に置かれた人の状況をそのままにしてしまうことに気がついた。</li> <li>・ 貧困状態にある人が声を上げることは難しいので、貧困状態にない人が問題を解決しようとしなければ、そのままになってしまう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 問題状況にある人が自らの状況を訴えにくいことに気づかせることで、自らの加害可能性に思いを致させる。</li> <li>・ 問題状況にある人が沈黙することが加害の構造を温存することに気づかせる。</li> <li>・ 不利益を被っている人との共生と結びつきを模索し、課題解決をめざす必要性を感じ取らせる。</li> </ul>	
--	---	--	---	--

- ・ 資料 1: 国立大学法人お茶の水女子大学「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」(2013 年度)
- ・ 資料 2: 文部科学省「教育費負担と学生に対する経済的支援の在り方に関する実証的研究」(2014 年度)
- ・ 資料 3: 厚生労働省「平成 28 年 国民生活基礎調査」
- ・ 資料 4: OECD Family database “Child poverty”, 2014
- ・ 資料 5: 山野良一『子どもの最貧国・日本』光文社文庫、2008
- ・ 資料 6: OECD: Education at a Glance, 2017
- ・ 資料 7: 林明子『生活保護世帯の子どものライフストーリーー貧困の世代的再生産』勁草書房、2016 より作成

## 5 実践授業の実際

2021年11月12日(金)に和歌山県立日高高等学校附属中学校3年生(当日出席者35名)で実践授業を実施した。授業は上記指導案の通りに行われた。

## 6 実践授業の成果と課題

### (1) 授業評価の概要

下記評価基準に基づき、授業後終結時における生徒の振り返り(自由記述)を評価した。

#### 【思考・判断・表現】

#### ○ 評価規準

- ・ 社会学的想像力を働かせながら、「子どもの貧困」問題について考えている。

#### ○ 評価基準

A: Kさんの状況について考えあうことを通して、自分の加害可能性について言及している。

B: Kさんの状況について言及している。

C: Bに達しない。

#### 【学びに向かう力】

#### ○ 評価規準

- ・ 「共生」に向かおうとする態度が育っている。

#### ○ 評価基準

A: 社会的不平等について、他者と関わり合い、また、自らの変容によって課題を解決しようとしている。

B: 社会的不平等の是正の必要性を指摘している。

C: Bに達しない。

### (2) 評価の例

評価の例を次ページ表1に示す。

### (3) 評価結果

評価結果を表2に示す。

表2 評価結果

		思考・判断・表現			計
		A	B	C	
学 び に 向 か う 力	A	3	12	6	21
	B	0	5	2	7
	C	1	2	4	6
	計	4	19	12	35

### (4) 考察

表2に示したとおり、多くの生徒が自らの変容によって課題を解決しようとしている(学びに向かう力=A)一方、自らの加害可能性に言及している(思考・判断・表現=A)の生徒は、決して多くはなかった。

授業展開の「多くの人が『問題に対して声を上げても仕方がない』と考えること」にどのような問題があるのだろう。」という問いについて考えあう場面では、貧困状態に置かれた本人の状態が変わらないだけでなく、問題があることが無視され、社会的な解決につながらないことに10班中9つの班が気づいていた。しかし、その気づきを問題があることを無視することができる自らの特権性の認識に結びつけることができなかつたことが、本実践授業の課題として指摘できる。

## 6 本研究の成果と課題

本研究では、「社会学的想像力」に着目し、「共生」をめざす社会科授業を構想・実践した。

授業後の生徒の振り返りでは、自らの変容によって課題を解決しようとする「共生」の立場に立つ振り返りが多く見られた一方、「社会学的想像力」を働かせ、自らの加害可能性に言及している生徒は多くはなかった。「共生」に向かおうとする態度が見られなかった(学びに向かう力の評価がB・Cであった)13名のうち、社会学的想像力を働かせ自らの加害可能性に言及することのなかった(思考・判断・表現の評価がB・Cであった)者が12名(92.3%)であり、両者には強い相関があることが示唆された。しかしながら、問題があることを無視することができるという自らの特権性の認識は、決して容易なことではない。だからこそ、このような実践を積み重ねていく意義があるのだと考える。

表 1 評価の例

- 子どもの貧困問題について、印象に残ったのは、多くの人が、貧困問題に対して、「声を上げても仕方がない」と考えていることです。私は、もっと積極的に助けを求めていってもいいのではないかと思いました。でも、「仕方がない」と思わせてしまっているのは、周りの人のせいかもしれないから、自分から変わる必要があると思います。(思考・判断・表現:A) この問題を解決するには、私達が納めている税金を貧困の子供たちに使ってもらえるように若い世代の私達が行動する必要があると思いました。(学びに向かう力:A)
- Kさんの話しのようなものをときどき見たりすることがあったのですが、貧困のままで“だれが得をするか”を考えたことはありませんでした。今回の授業で、政府や政治家がなかなか動いてくれないという問題があるということに初めて気づきました。そして自分が問題を深く考えていなかったことにも気づき、世の中にはおおやけになっていないその人にとって重大な問題があるのだらうと思いました。私のような深く問題を考えていない人の声のせいで、“声を上げても仕方がない”と思う人も多かったのではないかと思います。(思考・判断・表現:A) 自分自身に問題がふりかえっていないと感じにくいことだとは思いますが、まずは現状を知り、共に声を上げるのが重要だと思いました。またそれを心がけていきたいとも思いました。(学びに向かう力:A)
- 貧困問題に困っている子どもたちが私たちの知らない場所でいて、その子たちは周りの人に言えなくて、人でなやんでいる(思考・判断・表現:B) と考えると、もっと日本は相談しやすい場所を作ってあげたり、お金をくばってあげるなどして、助けてあげるべきだと思いました。またその子たちは、本当にやばくなった時に相談できる場所がなければ、何かあった時には手おくれになるのではないかと思います。(学びに向かう力:B)
- 中学時代に「お金がないから友達と遊びに行くことができなかった」とKさんは言っていて、もし私がKさんの立場なら、生活を辛く感じると思います。Kさんもそう思っていたのだとしたら、すごく心細かったことだらうと思います。印象に残っているのは、Kさんが誰にもそのことを言わなかったことで、「言ってもしょうがない」と言っていました。その通りだと思います。普通と違うと私も変な目で見てしまうし、好奇心目で見られる可能性だってあって、そのことを考えると言うのは困難なのかもしれません。(思考・判断・表現:A) 家に頼れる存在がいること、それから、お金があることへのありがたみがわかりました。(学びに向かう力:C)

【注】

- 1 文部科学省『中学校学習指導要領解説 社会編』2017、p.9
- 2 渡部竜也「社会問題提起力育成 をめざした社会科授業の構想—米国急進派教育論の批判的検討を通して」全国社会科教育学会『社会科研究』第 69 号、2008、pp.1-10
- 3 塩原和『共に生きる—多民族・多文化社会における対話』弘文堂、2012、『分断と対話の社会学』慶應義塾大学出版会、2017a
- 4 戴エイカ「『多文化共生』とその可能性」大阪府立大学『人権問題研究』3 号、2003、pp.41-52
- 5 C・ライト・ミルズ、伊奈 正人・中村 好孝(訳)『社会学的想像力』筑摩書房、2017
- 6 伊奈正人・中村好孝『社会学的想像力のために—歴史的特殊性の視点から』世界思想社、2007
- 7 塩原良和「越境的想像力に向けて」塩原良和／稲津秀樹編『社会的分断を越境する—他者と出会いなおす想像力』青弓社、2017b
- 8 ガルミンダ・K.バンプラ 金友子訳『社会学的想像力の再検討—連なりあう歴史記述のために』岩波書店、2013、p.119
- 9 塩原良和、前掲書、2017a、2017b
- 10 坂本佳鶴恵『アイデンティティの権力—差別を語る主体は成立するか』新曜社、2005
- 11 岩野清美「学びに向かう力と社会科の授業デザイン—中学校社会科公民的分野「私たちと政治」単元を事例として—」金子邦秀監修・学校教育研究会編『多様化時代の社会科授業デザイン』晃洋書房、2020、pp.64-72
- 12 森分孝治『社会科授業構成の理論と方法((社会科教育全書 7)』明治図書、1975
- 13 塩原良和、前掲書、2017a
- 14 早川操「変革的リテラシーの展望」田浦武雄編『アメリカ教育の文化的構造』名古屋大学出版会、1994